

発行所 日本余暇学会 発行人 薗田碩哉 発行日 平成19年七月三十日

日本余暇学会ニュース

第59号

日本余暇学会事務局
〒191-0016
日野市神明1-13-1
実践女子短期大学
生活福祉学科
薗田研究室内
Tel/FAX 042-584-5428
e-mail
yokagakai@mail.goo.ne.jp
Home Page
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~d-pal/yoka/yoka.htm>

朝大使館めぐりウォーキングツアーに参加するのよいだろう。
二日目は一般発表と江戸の余暇学特別発表が予定されてお

大会受付期間を特別に延長

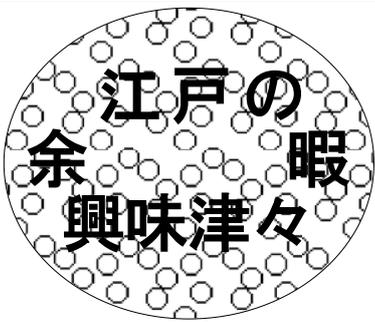
第11回 日本余暇学会研究大会の実施が9月8日(土)、9日(日)にせま

6月がまぢおおこし... 申し込み締め切りは8月10日

マに講演、シンポジウム、発表などを予定している。うにお願いしたい。

るため、日本余暇学会員の中で、まだ申し込みがすんでいない方も8月10日まで

た。今年の大会は東京四谷・上智大学や六本木ホテルアイビスを会場に「江戸の余暇を探る」をテーマ



昨今の江戸ブームを受けてか、本大会のテーマに反応したのか、各種マスコミ、会員外からの問い合わせが事務局に相次いでいる。予想以上に問い合わせや申込書の請求があったので、予定していた7月31日の締め切りでは混乱が予想されるため、大会事務局は申し込み締め切りを8月10日に延長することを決めた。この延長は会員のにも適用され

第一日目には東大史料編纂所の山本博文教授の講演や青木宏一郎、金森敦子両氏等のシンポジウムが企画されていることもあり、特に前評判が高く、問い合わせも多い。
好評の懇親会はまだ定員に余裕があり、多くの参加者の申し込みを促したい。シンポジストの参加も予定されており、著名な江戸研究者との交流も期待できる。

探検隊の「お手並み拝見」というところだ。さまざまな団体とコラボレーションを行ってきた日本余暇学会としても、多くの会員の参加で存在感を見せつけた。一人でも多くの余暇学会員が参加し、ぜひ六本木探検隊との交流を深めてほしい。また、お得な宿泊プランも用意されているので、この機会にホテルアイビスに宿泊し、変わりゆく六本木の夜を楽しんだり、「早

【お詫び】
過日送付した「第11回研究大会参加申し込み書」に誤りがありました。第二日目の日付が9月10日(日)となっていました。訂正します。(山田)

(写真・新旧会長と旧事務局長)



長い間 有難うございました
去る5月19日、東京・渋谷区実践学園で瀬沼克彰前会長の退任式、高尾都茂子前事務局長からの引継式が行われました。またそれにあわせて両会員のこれまでの日本余暇学会への多大な貢献に対し、感謝状と花束が贈呈されました。

- 今号の紙面から
- 2. 中部ブロック報告 余暇学研究合評会
 - 3. 九州ブロック報告 江戸余暇学のためのブックガイド
 - 4. 「余暇学研究」投稿規定 追悼・三上良一会員、美術展報告

中部ブロック 「佐久市」で研究会開催

6月11日、信州短期大学（長野県佐久市）において、日本余暇学会中部ブロックなどが、余暇研究の一環として「方言の基礎知識を学ぶ講座」を開催し、多くの会員たちが有意義な一日を過ごした。

昨今、方言は各地で急速に消えつつあるが、その一方で、保存を図る動きもあり、また、レジャーの分野でも、方言が醸し出す温かみ、優しさ、地方色などをサービスの面で活かそうとする動向もある。

そこで今年度の中部地区研究会は、佐藤亮一先生（左写真）を講師に迎え、「方言の基礎知識を学ぶ」と題した研究会を開催した。

佐藤先生は、国立国語研究所言語変化研究部第一研究室室長、フェリス女学院大学、東京女子大学の教授を歴任。『日本言語地図』な



る。佐藤先生の講義は、主として専門分野のひとつである「言語地理学」の立場から、伝統的方言の分布についてであった。「東西方言の対立」では、「イルとオ

ルの「ジョッパイとカライ」「ヤノアツサツテとシアサツテ」などの分布の例を示し、東西方言の境が糸魚川―浜名湖線にあつて、自然の障壁が言語の境界として作用するとの指摘は興味深かった。また、東西方言は西が優勢となる傾向が強いと聞いた時、最近疑問に感じていた現象が理解できたような気がした。さらに先生は、「方言圏論」について例を示しながら解説した。これは古語が中央から遠く離れた地域に方言として残存

る。6月11日、佐久平は晴天

に恵

まれ

た。

日本

余暇

学会

方言は「余暇の言葉」 標準語は「仕事の言葉」

からには菌田会長を始め4名の理事、会員、本学からも

榎山理事長、篠原学長を始め理事、教職員、学生、そして地域住民の方も出席して、総勢46名となった。

布などがあるという。佐藤先生のお話にはユーモアがあり、しばしば会場の笑いを誘った。研究所時代、犯人の住む地域を特定するために誘拐や脅迫事件の捜査協力を要請されること

があり、また、松本清張の「砂の器」が映画化された際は、研究所も舞台になった。ロケハンに訪れた監督が佐藤先生に、ぜひ出演し

て欲しいと申し入れたという。そのシーンに登場する“痩せて貧相な研究員”のイメージ通りだったからだ。だが、“俳優”にはなり損なった由である。

日本二大難解方言の薩摩弁と津軽弁の会話を吹き込んだCDを聴かせていただいた時、その会話の内容がまったく理解できないおかしさに、会場中大いに笑った。だが、ただ一人、一方の内容を理解してクスクス笑っていた人がいる。福田理事夫人、縁さんである。

第二部「夜の研究会」は、まさに談論風発。佐久は知る人ぞ知る酒処でもある。若女将さんが19代目という老舗「佐久ホテル」で、名物の鯉料理とくれば、どうなるか・・・。本学教授の「大学教員であることの喜びを噛みしめた夜だった」という感想で、この研究会の雰囲気を察していただきたい。（中藤保則）

柳田園男が解釈したもので、A B A分布、A B C B A分布

大塚寛美 信州短期大学
工藤のぶ 東北女子短期大学
小向敦子 城西国際大学
片桐学 信州短期大学

新入会員

『余暇学研究第10号』 合評会開かれる

「余暇学研究第10号合評会」が、去る5月19日、東京・渋谷区実践学園で開催されました。生憎の天気にもかかわらず、各地から12名の参加があり、菌田会長のあいさつのち、活発な議論が繰り広げられました。第10号は「余暇学の再構築に向けて」という企画特集があったため、「余暇学」という概念に関する議論や今後どのように余暇活動をおこなっていくかといった根本的な議論もなされました。

その後、各人が順番に自身の投稿論文や議論したい論文を提案し、その提案をうけて意見交換がなされました。昨今、「労働環境」が社会問題化していることを受けて、辰巳厚子会員の「はたらきすぎの時代におけるワー

ク・ライフバランスをめぐる考察」に関してはさまざまな年代の参加者から発言がありました。また宮入恭平会員は自身の渡米や演奏経験などを踏まえて執筆した「カラオケとKaraoke」に関する報告をいたしました。会場の都合から短時間でしたが、宮入会員の発表は多くの参加者の興味を引きました。宮入会員は9月の第11回大会での音楽関係の発表を予定しているそうです。



今年の学会大会は「江戸の余暇」がテーマ。この機会に江戸時代に強くなるようにと考えて、江戸本を渉猟してみた。

従来、江戸時代といえど、鉄壁の封建体制のもとで百姓人民は領主の苛斂誅求に喘ぎ、絶望的な一揆を繰り返していた

：というようなイメージがあったが、マルクス流の歴史学を機械的に当てはめた「貧農史観」

はだいぶ修正の必要がありそうだ

（佐藤常雄・大石慎三郎『貧農史観を見直す』講談社現代新書）。村々に残る資料を仔細に検討すると、まったく異なる世界がみえてくる。百姓たちは銭を用いて布を買い、それを身にまといて祭りを盛り立てた。また、広い敷地に庭を造り、茶・書・華をたしなみ、俳句をよんで旅をした。つまりは余暇を楽しんでいた。その一方で、乏しい資源を大切にし、浪費を抑え、そして元氣よく働いた、という（田中圭一『百姓の江戸時代』ちくま新書）。鎖国とは対外侵略のない平和な社会であり、交通が整備されて商業が発展し、そのための読み書きが求められ、そのことが土台になっ

「江戸本」を読もう 江戸余暇学のためのブックガイド

て武士から町人に至る幅広い担い手による独自の文化が形成され（倉地克直『江戸文化をよむ』（吉川弘文館）、半近代とも言えるような経済社会が形成されていた（速水融『近世日本の経済社会』麗澤大学出版会）。
そのあたりを押さえて各論に入ろう。まずは今大会の基調講演者である山本博文先生『江戸庶民の旅』（平凡社新書）は、当時の旅の実態を克明に追い、特に各地にあった閑所に焦点を当てて旅の真相を見ている。旅する女性たちがいかに多かつたかがわかる。考えてみると今と大して変わらないのかも知れない。
余暇学とつながる江戸本としては、古くは大正期の三田村鳶魚『娯楽の江戸』（中央公論社の鳶魚全集第10巻）辺りから、興津要『江戸娯楽誌』（作品社）、武内誠『江戸の盛り場考』（教育出版）、『江戸の大道芸人』

の出世作『江戸お留守居役の日記』（読売新聞社）。江戸初期の萩藩江戸藩邸の「外交官」の日記を読み解いて、当時の武士の政治活動の機微を手取るように理解させてくれる名著である。山本教授には啓蒙的な本がたくさんあって、例えば、『江戸時代を探検する』（新潮文庫）を見ると当時の武士と現代サラリーマンの生活を対比して親しみが持てる。その上、小さい本の割には資料調べの基本や崩し字の読み方まで紹介していて親切だ。江戸の余暇をズバリ取り上げているのは今回のシンポジストのお一人、青木宏一郎氏の『江戸庶民の楽しみ』（中央公論新社）で、

江戸に「遊び場」ができた17世紀前半から説き起こし、町人の遊びの発展史を跡づけ、「遊び都市」江戸の成熟へと説き至る。巻末には長大な「江戸レジャー年表」が添えられていてまことに

便利な本である。もうお一人のシンポジスト、金森敦子氏の『江戸庶民の旅』（平凡社新書）は、当時の旅の実態を克明に追い、特に各地にあった閑所に焦点を当てて旅の真相を見ている。旅する女性たちがいかに多かつたかがわかる。考えてみると今と大して変わらないのかも知れない。
余暇学とつながる江戸本としては、古くは大正期の三田村鳶魚『娯楽の江戸』（中央公論社の鳶魚全集第10巻）辺りから、興津要『江戸娯楽誌』（作品社）、武内誠『江戸の盛り場考』（教育出版）、『江戸の大道芸人』

新執行部の設立を受け、九州ブロックが5月に発足しました。九州から発信する「余暇」課題を2点に絞り検討・調査を行っています。

◎余暇力検定について

巷では検定ブームが起りかかっているが、余暇の世界とこの検定ブームを結びつけることが出来ないか？又、余暇学研究の裾野を広げる良い材料とはならないかを検討した結果、シニア、団塊世代の満足度を高める施策として有用であると判断し、検定ブーム火付け役となった「定年力検定」を参考に「余暇学検定」を創設出来ないか検討を行っている。ジャンルを以下の10に分けジャンル別に余暇学を楽しむことが出来るか？①時間：時間の価値・時間のじゅくり度・時間のルーツ・時間②人：人物③歴史：遊びの歴史・ハレとケ・学校制度における学び（余暇）・余暇の流行・祭り④法・国際法・国内法⑤ライフスタイル：定年・服装・家計・マスメディア・トレンド⑥社会性：地域における余暇・ボランティア・福祉⑦あそび：観光・落語の世界・レジャーの種類・趣味⑧産業：服・靴の流行⑨格差：地域間格差・世代間格差（NHK生活スタイル調査？参考）⑩データ：年代別データ・団体・レジャー施設・資格検定として成立するかを検討中です。

九州ブロック 活動報告

検定のための指定書籍として、余暇学会発行の『余暇学を学ぶ人のために』『余暇の世紀』の2冊選び、この2冊から、設定のジャンル分け、約50%位問題が作成できそうかを支部会員が本を読んで検定中です。9月の大会で、余暇学検定を提案できるようにまとめている途上です。

◎「余暇と街の研究」

街おこしとか、観光とかの観点ではなく「余暇の場や空間、時間」を街から発見できないかを課題に、「街から余暇発見」「余暇から街発見」と題し、街の使われ方などを研究を始めました。6月、街から余暇発見、余暇から街発見のため町屋保存地区がある八女福島へ行って、まず古き街並みから余暇を感じ取れるか実際に街歩きをしてみました。又、同時に街並み保存地区で活動をしているリーダーとも懇談してきました。副テーマは、『空間と時間』になりそうです。例えば、水琴窟を聴きながら過ごすゆとりの場、時間。しとみ戸（跳ね上げの軒）による、憩い空間。

色々、町街には余暇に関するものが沢山あったようですが、消えつつあるようです。こちらも9月の大会で発表できるようにさらに検討を進めています。（前田淳）

「旅」美術展情報

7月14日(土)～9月30日(木)まで、東京日本橋室町三井本館の「三井記念美術館」で、『美術の遊び』

「旅」という企画展が開かれている(三井記念美術館・朝日新聞社主催)。今回は、その美術展について報告する。本美術展は、先人が「旅」に寄せてきた様々な思いを絵画、書跡、工芸品の名品によって紹介するものである。展示はいくつかのテーマに分けられ

ている。「小さな旅」のコーナーでは身近でアウトドア的な展示物がある。たとえば様々な地理情報を描いた印刷、たばこ入れ、茶道具などの展示がみられた。数日間の外出に適した小道具は、装飾にも地理情報があふれていて、手にしたときから旅心をいざなう。次のコーナーでは屋外での茶会に用いられた茶道具が多数展示されている。「霊場と名所への旅」コーナーでは布教と参詣という宗教的な旅と、遊山・文芸的な旅に分けて絵画の名品などが展

示されている。中でも藤原定家による国宝「熊野御幸記」や「一遍聖絵第二巻」は庄巻である。ほかにも重文「富士曼荼羅図」や熊野那智、天橋立など各地の名所風俗図屏風が展示を盛り立てていた。「イメージへの旅」では西行、芭蕉を中心に、和歌や俳句で詠まれた名所を題材とした工芸品などが展示されている。芭蕉直筆の句文などもあり人となり忍ばれる。広重による名所図も興味深い。広重図では「日本橋」の真ん中に田舎から上ってきた人々

を登場させた「田舎道者江戸見物」と、「品川宿」の対比がおもしろい。日本橋のような名所にはいかにも旅慣れていない「お上りさん」が町をキョロキョロしながら歩いているのに比べると、品川を歩く人々は飛脚、駕籠、軽装の旅人など「颯爽」と歩く人ばかりであった。最後に庄巻だったのは「鳥瞰図」、「道中屏風」である。鳥瞰図はまるで鳥が上空から見ているような地図だが、今日のように巨大建造物がないので、山岳

と寺院が目印として描かれている。今日みれば稚拙なデフォルメだが、この図を見ながら旅人が「イメージ」を「レーニング」をしていった様が想像される。最後の「大日本五道中屏風」は江戸から長崎の行程を東海道、中山道を中心に描いた約26mといわれるものである。細かくみていけば今日では小さい町が、大きく描かれていたり、その逆もある。当時の人々が何をみながら街道を歩いたのかが興味深い。また時代ごとに認識されている空間が拡大し、近世には海外にも興味が向けられていく様子もうかがうことができる。この展示会は9月30日まで開かれており、9月8日からの「日本余暇学会第11回研究大会」期間中も開かれている。なお、展示換えや定期休業がある

三上良一会員を悼む

三上良一さんが四月十五日、突然に逝かれた。奥様からのお便りでは、散歩の途中に倒れられ、そのまま帰らぬ人になられたという。急性硬膜下血腫、七十才だった。亡くなる直前に撮られた写真は一面のチューリップの列が写っていた。国会図書館に長く勤務され、その後(財)日本レクリエーション協会で役員をされた。余暇学会では落語や寄席に関心向けられ、研究誌10号に「通の世界から大向こうの世界へ」を書かれたばかりだった。「三上さん、急ぎすぎだよ」と呼び返したい。永遠の余暇に入られた三上さんは、江戸遊芸の世界を心ゆくまで楽しんでいられるのであろう。(藪田碩哉)

『余暇学研究』第11号 投稿募集!

『余暇学研究』第11号の投稿を募集致します。投稿予定者は以下の募集要領に従い投稿下さい。今号は年度内刊行を目指し、日程を早めましたのでご注意下さい。

■ 投稿原稿の種類と字数
論文(総説、原著)10,000字以内、研究ノート(短報、話題、提言等)7,000字以内 エッセイ4,000字以内
(図表、写真掲載の場合、相当字数分を差し引くこと。)

■ エントリー方法
投稿希望者は平成19年9月20日までに学会事務局にエントリーする。エントリーは、氏名、所属、住所、電話番号、タイトルを記し、概要を200字にまとめものをFAXまたは郵送にて行う。概要によっては投稿を認めない場合がある。

■ 査読について
論文投稿は、編集委員会が選任する査読委員の査読を受けるものとする。論文としての要件を備えていない場合、研究ノートまたはエッセイとすることがある。その場合、原則としてそれぞれの区分に応じた字数に書き直すこととする。

■ 採否 投稿原稿の採否は編集委員会で決定する。

■ 入稿方法 原稿は原則として電子テキスト(フロッピー、CD等)による。

■ 投稿資格 原則として日本余暇学会会員に限る。

■ 原稿締切 平成19年10月31日とする。発行日は平成20年3月末予定。

エントリーされた投稿予定者には、投稿規定、執筆要領(一部改正予定)を配布致しますので、規定類を遵守し、投稿下さい。(編集委員会)

へんしゅう6あと

まもなく学会大会、全国の皆さんの会員とおあいできることが楽しみである。次号は大会報告です(山田)

ので日程等は、直接美術館に問い合わせてください
(TEL 03-5777-8600)。(山田)